秋芋の話

むかしあるところに、わんずかだ村あったわけだぁ。そこいの村にまんだ、誰の家にも秋芋植えで、秋さなればこの芋、昔だば庭だために、庭さその芋、表にいて分けるわけだ。しゃぁ今度、乞食来て、「なんだってその芋たった一つけれ」って言わったどぉ。だ、今度、けねわけだぁ。隣さ行ってもけね、まだ隣さ行っても、まだけれってしゃべったたって、一つもけねど、はぁ。そいで、今度しゃぁ、けねし、どうもなんねし、やっこ、乞食だったねぇ、もどって行ったわけだぁ。次の年、その村の秋芋まで、ツルだばたいした良く伸びたども、掘るいなったば、なぁんも芋つがねぇ。ままんーで、どご家のにも石っこばりついてがぃ。そごの村で芋ひとっつ、ければねぇ、豊作ならじぃ、ままんーで石っこばがりなって、なんぼかそごの村貧乏なってはぁ、倒れてしまったわけだぁ。それ、神様だったねぇ。ひとっつければ、ほれぇ、いがったじぃ、それけねったためにほれぇ、ままぁんでその村はぁ、ねぐなってしまったった。それでとっぴんぱらりって言わった。　野村セツ(檜山　94歳)

〈解説〉

逆説的な教訓話である。乞食に芋をくれなかったばかりに、村が消えてしまった。乞食は神様の化身で、村人の意地悪な精神に罰を与えたものであろう。「七つの宝蔵」とは対照的な話である。これは結末が貧者になるという、長者物語とは対照的な話であるが、村の存亡を語る話である。